

世界遺産都市を歩く

第5回

岐路に立つ ブームタウン マカオ

ヴァズネセンスキー大通りから見たグリホエードフ運河（西向き）

文・写真
西村幸夫
東大教授



写真4 セナド広場から北へ続く町並み。



写真3 いつの時代もマカオの中心であるセナド広場。公的行事や祝祭、市民の集会などもこの広場が中心となる。

写真5 聖ポール天主堂跡のファサードと手前の広場。



マカオの歴史地区を歩くと、たしかに要塞や個々の教会建築などポルトガル植民地時代の貴重な建築遺産を見ることはできる。歴史地区へのそである議事堂前広場であるセナド広場（写真3）やそこから北へ続く町並み（写真4）はかつてのポルトガル植民都市の姿を彷彿とさせる。その筆頭はもちろんマカオのシンボルとなっている聖ポール天主堂跡だろう（写真5）。かつて東洋一の規模を誇ったこの教会の建設には日本人も関与していたという。長い上り階段の先に正面ファサードだけを今に伝えるその姿に感じるものはアテネのアクロポリスを登りきった時の感懐に似ていなくもない。

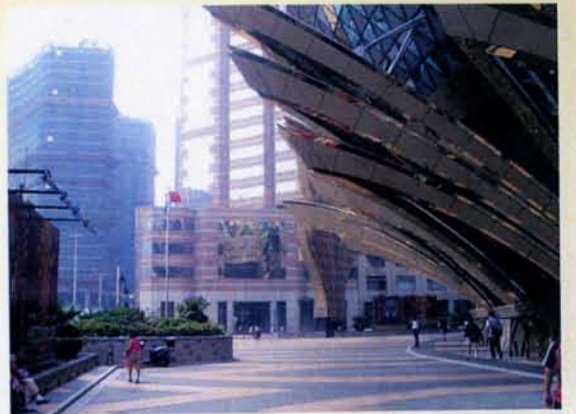
しかし、セナド広場と聖ポール天主堂跡とを結ぶ歴史の道筋は、1階部分が商店となっている安普請のゲタバキ高層住宅で埋め尽くされており、看板が氾濫する商店の姿は世辞

世界遺産都市を歩く

写真1 マカオのフェリー埠頭のすぐそばのマカオ市街地の風景。この左手にテーマパークが続く。これがまず、マカオを訪れたすべての人の目に飛び込んでくる風景である。



写真2 2007年10月現在建設中のホテル・グランド・リスボアの足もとです。すでにオープンしているカジノ。



マカオはいま、ブームタウンである。世界遺産に登録されたからではない。カジノ人気のせいである。2002年にカジノの経営権が外国企業に解放され、中国本土からの個人旅行も解禁されたことから、人口が万人足らずの半島は2000万人を上回る観光客が訪れる東洋のラスベガスとなった。いやすでにカジノの収益はラスベガスを上回っているという。巨大なビル建設が相次ぎ、スカイラインは刻一刻と変化の真つ最中である。ウォータフロントには巨大テーマパークであるマカオ・フィッシュヤーマンズ・ウォークがオープンし（写真1の左端に入り口付近がわずかに見える）、カジノ街には金色の炎の形をした異様なホテル・グランド・リスボンが立ち上がってきている。その足もとのこれまた奇抜な球型のカジノ部分はすでにオープンしている（写真2）。

こうした喧噪と過密の賭博都市からほんの数メートルの距離のところにマカオの歴史地区が位置している。



写真8 聖ポール天主堂跡の丘の上からの眺望。高層ビルが固まりになって見える。

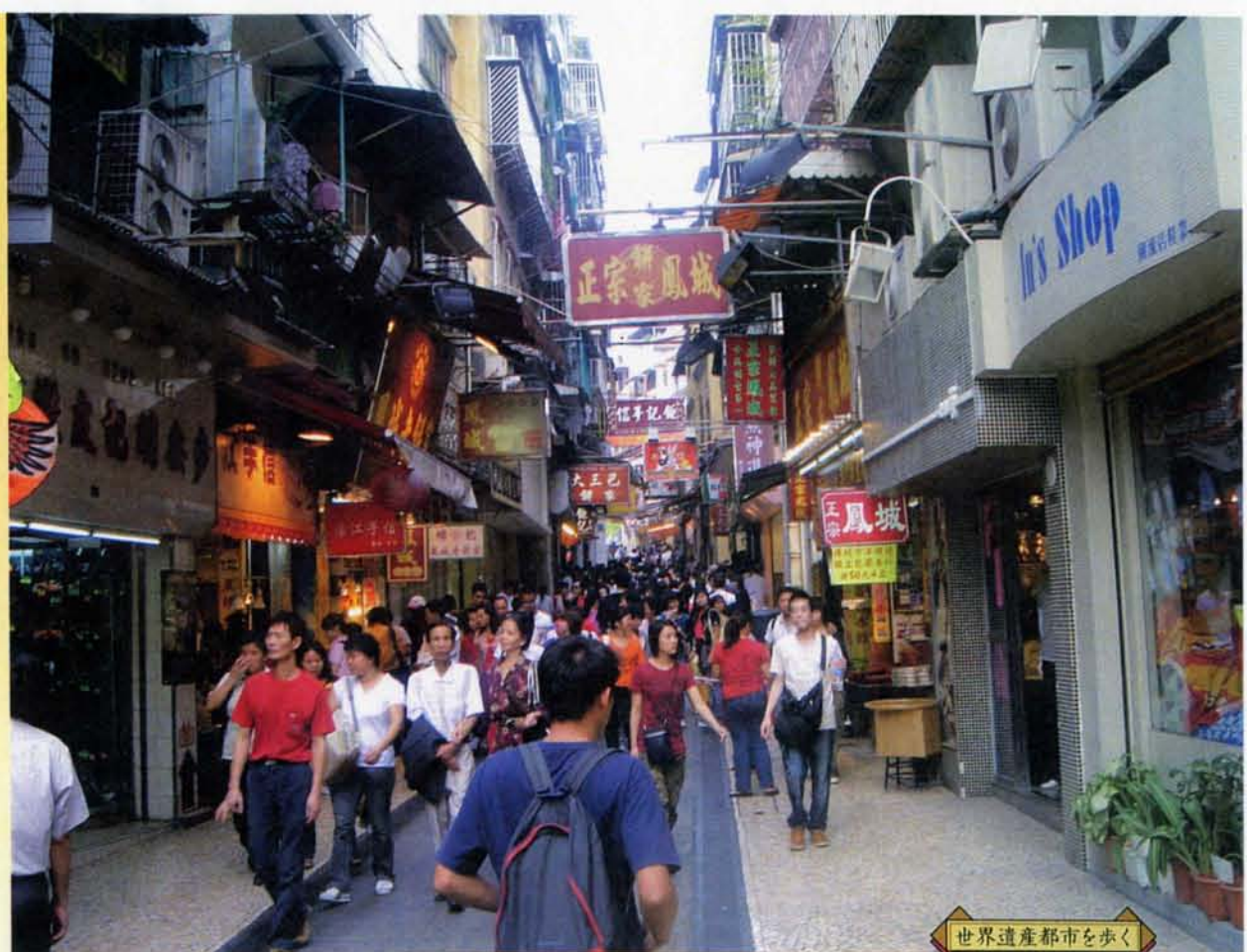


写真6 大三巴街の賑わい。この道筋も世界遺産のコアゾーンになっている。

世界遺産都市を歩く



写真7 聖ポール天主堂跡の開口部越しに見たホテル・グラランド・リスボンとその周辺。

にも世界遺産に似合っているとは言
い難い(写真6)。そこに観光客が
あふれかえっている。

おまけに聖ポール天主堂跡のファ
サードの奥から開口部越しにまちを
眺めると、さきに紹介したホテル・
グラランド・リスボンの建築中の異様
な姿が目飛び込んでくる(写真
7)。両者の距離は直線で800日
前後しかない。ほかのスカイライン
も似たり寄ったりである(写真8)。

● ● ●
心ある訪問者はこうしたマカオの
現状に驚くだろう。そしてなぜこの
ようなまちが世界文化遺産に登録さ
れているのか、いぶかしくおもうに
違いない。

マカオは2005年、「マカオ歴
史地区」としてユネスコの世界遺産
に登録された。この時の世界遺産委
員会に提出されたイコモスの評価書
には、マカオの歴史的価値について
次のように記述されている。

「マカオは西洋と中国との最初でも
っとも長く続いた(事実、マカオ
が中国へ返還されるのは1999
年だった…引用者注) 西洋と中国
の接点として、両者の文化交流の
歴史を示す例外的な都市である。

…その結果、芸術や建築の分野
のみならず、宗教、文学、多様な
文化、科学、医学の分野にわたる
自発的な文化の融合が歴史遺産と
して遺されている。…

マカオはまた変化を生み出す契
機となり、西洋の新しい思想を中
国へ導入する窓口であった。中国
で最初の西洋式劇場、大学、議会
制度などがマカオで生まれた。」

このほか中国最古の近代的灯台
や最初のプロテスタント墓地(マ
カオのプロテスタント建築の集積
はアジアで最大級である)、中国で
最初の西洋式城塞、最初で今も続
く修道院、最初の洋館、最初のバ
ロック建築、最古の西洋人の居住
区などがマカオには存在している。

もちろんそれだけではない。マ
カオがいかに(少なくとも184
7年に香港が植民地化されるまで

は) 海外交易上重要な位置を占め
ていたかも強調されている。その
中にはもちろん、中国からの絹、
日本からの銀が交易された日中間
のルートも含まれている。

● ● ●
ユネスコの最終的な審査もこう
したイコモスの評価に沿ったもの
となっている。それは事実として
は正しいかもしれない。しかし、
現実の都市がもたらしている景観
としてみたらどうだろうか。一般
的な訪問者は違和感を持つのでは
ないだろうか。ではなぜ、専門家
の評価のやり方は一般の訪問者の
実感とずれてしまっているのか。

それともマカオの別の読解法・評
価法があるのか。

マカオの世界遺産登録のための
申請書は、じつは手続きの途中で
おおきく改訂されている。当初案
(2001年12月提出) は中国と西
洋の文化交流の証しとしてマカオ
の歴史地区内に点在する建造物群
を個々に取り上げ、それらを列挙
するような形式で提案書が書かれ



LAND USE IN BUFFER ZONES
PLAN DOCUMENT No. 06

LEGEND:

 コアゾーン、および保存建造物	 公共建造物 教育施設/開発
 高住併用開発	 ホテル
 オフィス、および商業開発	 公園緑地
 政府機関	 その他
 工業開発	

ていた。当然といえば当然の記述ではあるが、これでは、印象が散漫になり、単体としてのモニュメントが散在し、これを取り巻いていささか安手の現代建築群が圧倒

的多数を形成しているという現状をうまく受け止めることができない。マカオの都市としての構造や歴史地区の意義も読みにくい。こうしたことからイコモスの指

摘を受け、コアゾーンやバッファゾーンの考え方を大幅に変更したのである(改定案、2004年12月提出)。現在のコアゾーンは、散在するモニュメント群ではなく、

図1 世界文化遺産「マカオ歴史地区」のコアゾーンとバッファゾーン。建造物も図示されている。(イコモス資料)

15世紀にさかのぼる中国人の港湾口の媽閣廟とその前に広がるバラ広場(写真9)から通称 Rua Direitaと呼ばれるかつての細い尾根道を上り、カテドラルへ至る骨格となる街路、さらにそこから聖ポール天主堂跡やモンテの砦、さらには最奥部の小高いプロテスタントの墓地までをつなぐ1本の幹線街路とそれに依拠して立地する八つの小広場、そして広場の奥や周辺に建つ合計22の歴史的建造物のセットとして組み立てられている(図1)。

主要な広場とは、河口部のバラ広場にはじまり、マカオ在住のポルトガル人たちの最初の居住地の広場であるリラオ広場(写真10)、聖オースチン広場(写真11)、中心的な祝祭広場であるセナド広場、カテドラル前のカテドラル広場(写真12)、古くからの中国人の市場でもあった聖ドミニコ広場(写真13)、聖ポール天主堂跡へ登る階段の足もとの広場(写真5、前掲)、そしてカモンエス公園と次第に坂を登っていくように配されている。

写真9 媽閣廟前のバラ広場、かつての寺院跡地。現在もマカオに住む中国人たちの憩いの場所になっている。



写真11 聖オースチン広場、右手は聖オースチン教会。このあたりにはドン・ペドロ5世劇場や聖ヨセフ修道院及び聖堂など世界遺産の構成資産が集中している



写真10 リラオ広場(右)、左は居住地へ通じる脇道。

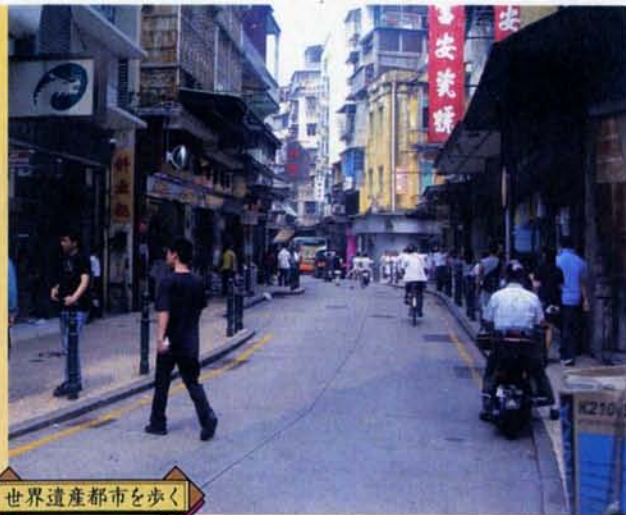
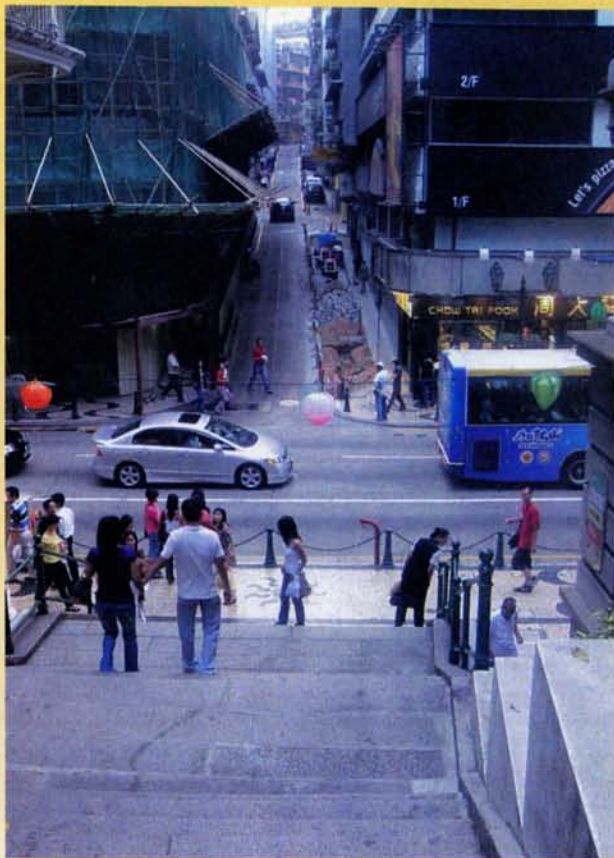


写真12 中国風バロック広場であるカテドラル広場(大堂前地)、カテドラル(大堂)の正面にある。



写真13 地中海風の聖ドミニコ広場、右手は聖ドミニコ教会。





世界遺産都市を歩く

写真14 歴史地区西側のバッファゾーン
の境界となっているメルカドレス通り（果
欄街）。湾曲しているのはここが16世紀当
時の海岸線だったことを物語っている。道
路右手がバッファゾーンの内側。

写真15 一見なんでもないように見えるこ
の通りがいわゆるRua Direitaと呼ばれる
都市軸である。ただし、この部分では左右
に通過している幹線道路、アルメイダ・リ
ベイロ通りに阻まれて、直進することがで
きない。こうしたところにこそ横断歩道を
つけるべきであろう。

また、これらの都市軸に沿って建
つ建物も植民地建築ばかりではな
く、中国の寺院や住居も含まれてい
る。コアゾーンの人口密度が377
人/haに達する超高密社会、ポルト
ガル人と中国人が狭い都心部にお互
いに文化的な影響を受け合いながら
肩を寄せ合うように集住してきた都
市の姿を描き出そうというのが、世
界遺産のコアゾーンの考え方であ
る。

また、バッファゾーンはおおよ
そ15世紀から16世紀の海岸線（現在
では道路となっている、写真14）に
よって画定されている。ここにもひ
とつの都市形成史の論理がある（な
お、ギア要塞と灯台（これは中国最
古の近代的灯台である）だけはやや
離れた小高い丘に立地しており、独
立したコアとバッファゾーンを持
っている）。

● ● ●
強調されているのは都市構造、そ
れもマカオの歴史地区の居住地とし
ての空間構成の基礎を形作ってきた
都市軸としての街路（写真15）と広

場のネットワークなのである。マカ
オという植民都市の空間構成の物語
を端的に描き出そうというのが世界
遺産登録のストーリーだ。このルー
トは必ずしも既定の観光コースでは
ない。このように地区の文化的な重
要性を論理立てて示すところに近年
の世界文化遺産の申請の特色があ
る。

しかし、こうした意図を来訪者が
雑踏の中を歩きながら読み取ること
ができるのかは別の話だ。仮に読み
取れたとしても、それはたんに思考
実験に止まり、周辺に林立する安普
請の高層ビルの印象の方がはるかに
卓越しているということもあるだろ
う。世界文化遺産登録のための巧妙
なストーリー展開も周囲の巨大な開
発の現実には押しつぶされてしまっ
ているといえるかもしれない。

世界文化遺産が頭でつかちのコン
セプトだけのものになり下がるの
か、それとも地区の歴史を再評価す
る有力な手段として浮上するのか、
ブームタウン・マカオは世界文化遺
産の新しい潮流の前途を占う意味で
も衆人注視のただなかにある。